

組織目標評価報告書（令和5年度）

20

部局名:

文明動態学研究所

学域名:

—

部局長名:

松本 直子

目標・取組		目標・取組の達成状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	関連する 中期計画の番号	教育領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>課題:分野横断的視点・文明動態学的視点を教育に活かす。</p> <p>研究部門</p> <p>①研究所に設置している分析機器を活用した研究を学部生・大学院生も行えるような体制を構築し、異分野融合的研究の推進を担う若手研究者の育成に資する。</p> <p>②RECTORプログラムで招へいする海外研究者による学生対象のセミナーを開催する。</p> <p>③PDの受け入れを進め、研究所内外での研究発表を通じて分野横断的視点・文明動態学的視点を醸成する。</p> <p>文化遺産マネジメント部門</p> <p>④構内遺跡の調査・研究成果を活かし、博物館実習を行うことで、学芸員育成および実践型社会連携教育の拡充に寄与する。</p> <p>⑤ワークスタディを利用する学生を1名以上雇用し、経済的支援と同時に社会性の育成をはかる。</p>	8-1	<p>研究部門</p> <p>①研究所に設置しているポータブルXRFおよびX線CTについて、学部生・大学院生が研究に使用できる体制を整えた。また、理化学的な分析法や統計的な手法、デジタル技術を用いた研究指導も行い、新しい研究を担う若手の育成に尽力した。それにより、大学院生5名、学部生3名が文理融合的な研究を行っている(令和5年度の卒論3本、修論2本が該当)。</p> <p>②RECTORプログラムで招へいする海外研究者に変更があったが、文理融合型国際研究拠点形成事業でトリノ大学から招へいたVittorio Lauro氏による学生対象のセミナーを開催し、考古資料の3Dモデル作成に関する先進的な技術のトレーニングを行った。</p> <p>③昨年度に引き続きPD1名を受け入れ、6月に学会大会での発表、9月・3月に海外調査を実施し、日本にとどまらない多様な視点を備えた若手研究者の育成につとめた。また今年度新規に1名のPDを受け入れた。</p> <p>文化遺産マネジメント部門</p> <p>④構内遺跡の調査研究成果を博物館実習「埋蔵文化財の取り扱い」に活かし、博物館実習生の指導にあたった。</p> <p>⑤法学部の学生1名をワークスタディにより雇用し、マネジメント部門の一員として社会性の育成するとともに経済的支援を供した。</p>
②研究領域	関連する 中期計画の番号	研究領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>課題:人文社会科学を核とした分野横断的研究を推進し、持続可能な社会の構築に貢献する文明動態学を構築する</p> <p>①学際・融合領域における新しい研究プロジェクトや研究グループの創成支援を行う。</p> <p>②海外研究機関との連携を強化し、若手研究者の育成および研究力強化を目的として、国際研究プロジェクトを実施する。Be-Archaeoプロジェクトで構築したネットワークを発展させ、国際共著論文数を前年より10%増加させる。</p> <p>③文化遺産マネジメント部門では構内遺跡の研究を中心に、分野横断的研究を行う。</p> <p>④構成員の研究進捗状況を共有するため、研究セミナーを定期的に企画・開催する。</p> <p>⑤科研費の申請率100%、獲得率75%を達成するため、若手研究者の申請書の添削などに力を入れる。</p>	8-1	<p>①分野を超えた研究プロジェクトを募集し、9件を採択して新たな研究グループ創生を支援した。その成果として学術変革領域A、基盤研究Aを含む分野横断的な科研プロジェクト3件が採択された。</p> <p>②欧州との国際共同研究Be-Archaeoの最終年度にあたり、トリノ大学で研究成果に基づく展示を開催し、世界の大学院生・若手研究者を対象とするサマースクールを開催した。また、研究成果としてQ1の国際共著論文が4本刊行され、国際共著論文数は前年度より30%増加した。さらに、RECTORプログラム、文理融合型国際研究拠点形成事業および研究所が参画する学際ハブ形成プログラムにより、若手研究者のRyan Josephを中心に文理融合的国際共同研究を実施した。また、昨年度連携協定を締結したグアテマラのデルバジェ大学の研究者と、BIZEN中南米美術館(連携機関)所蔵の碑文画像資料の解読に関する新規共同研究事業を開始した。</p> <p>③マネジメント部門では、構内の20世紀前半期の文化遺産に対する学術調査として、橋梁演習施設の発掘調査やレンガ造り建物の三次元計測を実施した。また構内遺跡の評価を深化させるためRIDC共同研究や科研費の枠組みで、土壌や植物資料等複数の構内遺跡出土資料に対する自然科学的分析を実施した。</p> <p>④8月を除き毎月RIDCマンスリーセミナーをオンラインで開催した。セミナーには毎回40人前後から多いときは100人の参加があり、分野を超えた研究進捗状況の共有を推進した。</p> <p>⑤若手研究者を中心に、科研申請書の丁寧な添削を実施した。その結果、新たに1件の新規採択があった。</p>
③社会貢献(診療を含む)領域	関連する 中期計画の番号	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>課題:文明動態学研究所の成果を広く社会に還元し、持続可能な社会の創成に貢献する。</p> <p>①一般市民向けの公開講座、公開シンポジウム、展示会を開催する。</p> <p>②文化財の保護・活用、地域社会の維持・活性化を推進するため、地域社会や関係諸機関と連携する。地域の埋蔵文化財に関する事案について指導的な助言を行い、地方公共団体等の埋蔵文化財行政に寄与する。</p> <p>③刊行物やウェブサイトを通して研究活動や成果について積極的で分かりやすい情報発信を行う。</p> <p>④セミナー、シンポジウム等のオンライン配信・動画の事後公開を行い、研究成果へのアクセシビリティを高める。</p> <p>⑤史料ネット等と連携し、地域の文化財の保存・修復に貢献する。</p>	8-1	<p>①マネジメント部門主催の公開講座を3回、研究部門主催でオンライントークセッション「考古学×歴史学で古代吉備にせまる」を開催した。新学術領域研究との共催で国際会議「出ユーラシアにおける王権の創成」、国際オンラインセッション「カカオとアンデス文明のゆりかご エクアドル考古学の最前線」(エクアドル大使館後援)、を開催した。杉山三郎客員研究員が携わった「古代メキシコマヤ、アステカ、テオティワカン展」が東京国立博物館等で開催され、各種報道、テレビ番組などで大きな社会的反響を得た(鈴木真太郎も協力)。また附属図書館と共催で第31回知好楽セミナーを開催した。第22回岡山大学キャンパス発掘成果展「中世の吊い-鹿田遺跡の事例から-」を開催した。</p> <p>②岡山市、倉敷市、滋賀県の文化財保護行政に対して審議委員等の立場から助言を行い、津山市、丹波篠山市の市史編纂に協力した。</p> <p>③研究所のウェブサイト、Facebook、Youtubeを通して、分かりやすい情報発信を行った。また、オンライン・ジャーナル『文明動態学』第2号を刊行した。</p> <p>④マンスリーセミナーで公開可能なものをYouTubeで公開している。5DLabによる配信・動画作成を行った「考古学×歴史学で古代吉備にせまる」は、公開後2か月で8700回視聴を超えている。</p> <p>⑤『西日本豪雨災害による被災資料の整理作業報告書—倉敷 井上家文書—』、『倉敷市 真備土師家文書報告書』Ⅰ、『旧永瀬家住宅下張り文書目録』を刊行した。いずれも図書館リポジトリでダウンロード可能である。</p> <p>⑥JSTの「共創の場形成支援プログラム」育成型に採択された「ダイバーシティ農業地域イノベーション共創拠点」において、同拠点の参画組織である岡山県、関係事業者・農家等と連携し、農産物(桃)の新規販路開拓の仕組み構築を進めた。</p>

④管理運営領域	関連する 中期計画の番号	管理運営領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>課題 分野横断的研究の効率的かつ安全な推進を可能にする管理運営体制の構築</p> <p>①本研究所が目指す分野横断的・国際的研究を推進するため、インナーブランディングを強化し、活発な意見交換ができる組織づくりを行う。</p> <p>②分野横断的共同研究プロジェクトのインキュベーションに対して、戦略的に予算を割り当てる。</p> <p>③国際的研究者の客員研究員、客員教授等としての参画を通して、研究組織の活性化・国際化を図る。</p> <p>④公開講座の有料化等により、自己収入の増加に資する。</p> <p>⑤文化遺産マネジメント部門では、文化財保護法に則り、構内遺跡に対して、建設工事に伴う発掘調査や立会調査を適切に実施する一方、発掘調査報告書作成のための整理作業を進め、発掘調査報告書の刊行につなげる。また出土遺物・資料については適切な保管・管理を行う。</p>	<p>8-1 11-2</p>	<p>①教授会その他、マンスリーセミナーの企画運営、オンラインジャーナル『文明動態学』の企画編集などにより、活発な意見交換を行い、分野横断的・国際的研究を推進する組織づくりを行った。</p> <p>②分野横断的共同研究プロジェクトのインキュベーションに研究所予算の約4割を戦略的に割り当て、新たなプロジェクトを9件採択した。</p> <p>③アリゾナ州立大学、カリフォルニア大学リバーサイド校、台湾中央研究院から客員研究員の参画を得て、国際的な研究拠点形成を進めた。</p> <p>④公開講座の参加費を500円とし、自己収入を増加させることができた。</p> <p>⑤「文化遺産マネジメント部門では『鹿田遺跡17』を滞りなく刊行し、構内遺跡に対する立会調査を適切に実施した。津島岡大遺跡第41～43次調査を遂行し、第42次調査では12月に現地説明会を実施した。</p>

注1) 本様式全体が1ページに収まるよう作成してください。

注2) 自己評価による達成度(5～1)は非公表項目とし、組織目標評価結果を公表する際に消去します。

【続き】組織目標評価報告書（令和5年度）

部局名:

文明動態学研究所

学域名:

—

部局長名:

松本 直子

(※該当がある場合のみ) 昨年度の指摘事項に対する取組状況

改善を要する点	・論文数の増加を今後期待します。
対応状況	<p>国際的共同研究に若手研究者を参加させ、Web of Scienceで拾うことができる論文数の増加につながるような研究活動を活発化させました。今年度は国際共著のQ1論文を4本出すことができ、増加傾向にあります。引き続き国際的な論文を継続的に出していけるような研究環境の構築に務めます。ちなみに、日本語の論文を含めると専任教員9名でこの3年間で約100本の論文を出しており、研究活動は活発であることを申し添えます。</p>